

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第64号 2010年12月3日(金)

発行：歴史資料ネットワーク



▲奄美市住用公民館の被害状況。
(2010年10月26日、奄美市立博物館・久伸博
学芸員撮影)



▲皆瀬川地区の護岸被害。
(神奈川県豪雨被害調査にて) (2010年9月
20日、宇野淳子氏撮影)

CONTENTS

- 巻頭言
情報メディアの発達と災害対応—奄美豪雨対応をめぐって— —— 中野 賢治 (2)
- 第3回 神戸・阪神間歴史講座のお知らせ ————— (3)
- 奄美豪雨災害の状況と史料ネットの対応 ————— 中野 賢治 (4)
- 神奈川県における被災史料確認調査 ————— 宇野 淳子 (5)
- 台風9号と穴栗市一宮町閨賀地区区有文書 ————— 板垣 貴志 (8)
- 「水濡れ史料の吸水乾燥ワークショップ」の実施
——5年の歩みを通して感じたこと—— ————— 河野 未央 (9)
- 「第12回火垂るの墓を歩く会」参加記 ————— 澤井 廣次 (11)

情報メディアの発達と災害対応

—奄美豪雨対応をめぐる—

中野 賢治

地震・豪雨災害の情報がもたらされると、史料ネットでは、特にその初動段階においては情報収集に専念することになる。10月20日に鹿児島県奄美大島地域で発生した豪雨災害への対応においても（その詳細については、別の記事に譲る）、それは同様であった。ところが、関西に住むわれわれのもとに入ってくる情報は、テレビや新聞、インターネットを介してのものが中心で、なかなか文化財関係の情報を集めることができずいた。その後、メーリングリストを立ち上げ、鹿児島県の行政・博物館関係者に参加を呼びかけて多くの情報を集め、共有することができるようになったが、これにはかつて史料ネットの運営委員であり、現在は鹿児島県の尚古集成館で学芸員を務める岩川拓夫氏の協力が大きかった。鹿児島では今年の6月・7月にも大雨による災害が発生しているが、その時も同氏には学芸員としてのネットワークを活用して情報提供をしてもらっている。私個人にとっては大学院の後輩ということもあって、何かあればすぐにいろいろなお願いをすることができる心強い存在でもある（本人にとっては、大変迷惑な先輩だろうが）。

それと同時に、今回の災害対応にあたっては新たな情報ツールの活用が目立った。そのひとつがTwitter（ツイッター）である。ご存知の方も多いと思うが、これはインターネット上に上限140字の「つぶやき」を投稿するというもので、世界的なブームを経て、今や学生の就職活動や企業の商用マーケティングにも不可欠のものとされるほど、情報発信・収集のツールとして社会のなかに定着しつつある。パソコンや携帯電話からの投稿が可能で、写真も添付することができる。史料ネットの運営委員の中でも、これに登録して「つぶやく」ことがある種のブームになっている。私も普段は愚にもつかない、実にくだらない、とても皆様にはお見せできないようなことを、誰に語るともなくインターネット上に「つぶやいて」いる。

さて、このTwitterについては、かねてから災害時の利用のあり方が議論されることもあった。しかし私は災害時にパソコンや携帯電話を使用できる環境が整うかどうか、という点から、どちらかと言えばこれに消極的・否定的であった。ところが、今回の奄美豪雨に際しては、電気や電話が寸断されていたにもかかわらず、奄美の人々から「つぶやき」が大量に投稿されてきたのである。堆積した土砂、遠くを流れる濁流、そして避難所の様子などの写真が添付され、被害の様子を生々しく伝えてくれた。また、こちらからのメッセージも奄美の人々に直接投げかけることができた。史料ネットが設置しているブログのアクセス数が急激に上昇したということから、おそらく多くの人に受け止めてもらうことができたのだらうと思われる。さらには、株式会社資料保存器材との新たなつながりも、このTwitterを介して作ることができた。

また、もう一つの新しいツールがUstream（ユーストリーム）である。これはインターネットを介したビデオ配信・共有サービスで、「Ust」と省略されることもある。10月に開かれた日本史研究会の大会では、大会報告の一部がこれを使って全世界に配信されたことは記憶に新しい。テレビ番組でもこれを用いて世界からの同時中継を行うものがあるなど、こちらも情報発信のツールとして定着をみている。今回、奄美エフエムがこのUstreamを用いて24時間その放送を全世界に中継してくれたおかげで、交通路が遮断されて孤立している集落があること、避難所の支援物資

が充足していること、ボランティアの募集がまもなく始まることなど、さまざまな情報を得ることができたのである。

Twitter は 2006 年、Ustream は 2007 年に始まった新しいインターネットサービスである。今回はわれわれ委員の「新しもの好き」がたまたま役に立った格好になったが、思えば電子メールも、今でこそ情報発信のツールとして定着しているが、10 年以上前にはほとんど普及していなかった（例えば NTT ドコモの「iモード」のサービス開始は 1999 年のことであった）。それが今や被災地との連絡にも欠かせないツールとなっているのである。こうした情報メディアの動向については、常に強く注意を払っておく必要があるのではないか。

一方で、私自身、先に述べたように、これらが「いざ」という時にどこまで使い物になるのか非常に懐疑的であった。しかし、今回の災害対応において、どんなツールも使い方次第、使う人次第であるという当たり前の事実を痛感することになった。それだけではない。人と人とのつながりも、これらの情報ツールを介して形成することができるのだ。そのつながりは、あってはならないこととはいえ、次なる災害において大きな力となってくれるはずである。ちょうど、岩川氏がわれわれを助けてくれたように、このように重層的に積み重なった多様なつながりこそが、史料ネットの活動を可能にするのだということを改めて実感した。

さて、私事で恐縮だが、来春から某所の研究員として奉職することになった。事務局長の任も、とりあえずは今期いっぱいということになる。事務局からは少し離れるものの、つながりの一端を担い続けていきたいと思う。

(なかの・けんじ／歴史資料ネットワーク事務局長)

第3回神戸・阪神間歴史講座のお知らせ

「西摂」と呼ばれた神戸・阪神間の歴史像を広い視点から考えようという講座（神戸史学会など主催、史料ネット後援）が、12月19日午後1時半から、神戸市中央区京町、市立博物館で開催されます。第3回目は近世がテーマで、博物館学芸員が、研究成果を報告します。特別展の展示も拝観できます。

日時 12月19日(日)午後1時30分

場所 神戸市立博物館講堂(西側通用口から入館してください)

講師 高久智広(神戸市立博物館学芸員)「台場築造と大坂町奉行」

三好唯義(神戸市立博物館学芸係長)「博物館所蔵の近世絵図資料について」

参加料 500円

(博物館特別展「ワイドビューの幕末絵師貞秀」、企画展「江戸時代の日本図・中国図」と常設展を無料でご覧いただけます)

申し込み方法(先着150人)

e-mail : kobe_hanshin_history-owner@yahoogroups.jp へ。

神戸・阪神歴史講座の Web サイト

http://homepage3.nifty.com/koko-legend/kobe_hanshin_history/からも申し込みます。

ファクスで申し込みは神戸史学会編集部 072-783-1670まで。

奄美豪雨災害の状況と史料ネットの対応

中野 賢治

2010 年 10 月 20 日の集中豪雨により、鹿児島県奄美市を中心とする奄美大島地方は大規模な土砂・河川災害に見舞われた。鹿児島県のデータによれば、11 月 7 日段階で、死者 3 名をはじめ、建物損壊 154 棟（全壊 7 棟、半壊 132 棟、一部損壊 15 棟）、床上浸水 465 棟、床下浸水 901 棟を数え、土木・農林業を中心に 120 億円を超える大きな被害が発生した。被害の多く

は奄美市と龍郷町・大和村に集中し、電気・電話などのライフラインも一時寸断された（11 月 7 日段階ではほとんど回復）。10 月 29 日頃には台風 14 号の接近も懸念されたが、幸いにして直撃はまぬがれ、現在は復旧作業が進められている。

史料ネットでは、災害発生時から情報収集につとめ、同 27 日に奄美豪雨対応臨時委員会を開催した。今回の災害に対しては、遠隔地であることもあり、現地における直接的な支援は当面見送り、情報収集や関係者同士の連携・連絡など、関西からでも可能な支援を行うことに決定した。そのため、翌 28 日から鹿児島県を中心とする自治体・マスコミ・大学・ボランティア団体に史料保全や情報提供を求める手紙・ファックスなどを送付し、11 月 12 日までの約 2 週間、事務局に人員を常駐させる緊急体制をとった。さらに奄美豪雨メーリングリスト（amami_s-net@freeml.com）を開設して鹿児島・奄美地域の大学・博物館関係者の連携と情報の共有をはかっている。

全体の被害の状況が明らかになってくるなかで、文化財関係の被害も徐々に確認されつつある。なかでも、奄美市住用町の原野農芸博物館では、建物の 1 階部分に土砂が堆積し、収蔵庫に流木が直撃するなど、大きな被害を受けていたことがわかった。同館館長の原野幸治氏や奄美市立奄美博物館の館長中山清美氏を中心



▲奄美市住用の原野農芸博物館の被害状況（2010 年 10 月 27 日、奄美市立博物館・久伸博学芸員撮影、以下同じ）。



▲原野農芸博物館の入口付近。土砂がひざ下くらいの高さまで堆積している。



▲原野農芸博物館の収蔵庫の損傷のようす。

とする現地の博物館関係者やボランティアの尽力で復旧が進められているが、同館所蔵の民具や古文書などをはじめとする歴史資料の被害の全貌はいまだ判明していない。また、鹿児島県歴史資料センター黎明館が2002年から行った「奄美群島歴史資料確認調査」によって、同地域には中世以来の約1万点の史料が存在することが確認されているが（鹿児島大学「奄美古文書所在目録データベース」）、これらの史料のうち、個人所蔵となっている約2千点の安否は現段階で不明である。

史料ネットとしては、引き続き情報収集・提供を通じて現地の関係者ネットワークの支援を行っていく。

奄美豪雨の状況と史料ネットの対応については、史料ネットのブログも参照していただけると幸いである。



▲原野農芸博物館の収蔵庫を流木が直撃した。

●史料ネットブログ http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net

（検索エンジンで「史料ネット」「ブログ」「奄美」などと検索すると簡単です）

関連記事

奄美豪雨の被害状況(1) http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net/33452280.html

(2) http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net/33472726.html

水濡れ資料を捨てる前に… 奄美の皆様へ http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net/33481492.html

緊急事務局体制に移行します 奄美豪雨 http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net/33496978.html

（なかの・けんじ／歴史資料ネットワーク事務局長）

神奈川県における被災史料確認調査

宇野 淳子

2010年9月8日、神奈川県・静岡県では台風9号の影響で激しい雨が降りました。自宅にいた私に被害はなく、大変だなあと思いながらテレビの気象情報を見ていました。大和市の引地川で警戒水域を超えたこと、足柄上郡山北町で被害が出ていることを知り、被害情報はなくとも報道されるレベルの増水があるならば潜在的な被害があるのではないかと思ったのが、神奈川県内における被災史料という意識を持ったきっかけです。史料ネットが会員制に移行する前の1998年に歴史学研究会大会で募金の呼びかけをしているのを拝見してから史料ネットの活動はみてきていますし、史料ネットは事務局が神戸大学に置かれているとはいえ、関東に拠点のある学会も会員になっている組織ですので関東の被害状況も確認なさるだろうと思い、今の自分にできることとして、県内の市町村すべてのホームページを確認し、ブログ管理者である松下正和副代表へ情報提供をしました。その結果は「2010年台風9号に関する神奈川・静岡の被害」として9月11日付で掲載していただいています（http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net/33137447.html）。

その後、水損史料の有無を確認したいのならば動いてみたら?とアドバイスをいただいたことをきっかけに、地元神奈川県での史料保全の基盤づくりをするための活動を開始しました。とはいえ、大学の研究室や学会といった大きな組織での活動ではありません。神奈川周辺にお住まいで、以前名刺交換をさせていただいた方々のメールアドレスに、私信の形で連絡を差し上げることから始めました。同時に、史料ネット事務局にも相談し、進め方等のノウハウをご教示いただきました。

その結果、9月17日に学習院大学にて、神奈川ネット(仮)立ち上げのための打ち合わせを行いました。一週間足らずの期間の呼びかけにも拘わらず、安江明夫・小川千代子・安藤正人・富善一敏・松下正和・高野宏康の諸氏がお越しくださり、私を含めて七人で今後のあり方について検討することができました。その場では、被害状況を遠巻きに心配していても仕方がないので実見すること、被害が見られるならば対応を、幸いにして被害がなければ今回の所見を基に今後、被災時か否かに拘わらず史料



▲9月17日、打ち合わせの様子。
写真は富善一敏氏。

レスキューが必要な際に動ける組織を作ることと、短期と長期の目標を立てて動いていくことが結論となりました。

そこで、9月20日に松下副代表・藤沢市教育委員会の細井守氏、宇野の三人で山北町に赴きました。17日から20日まで開庁日がなかったこともあり、町役場にご連絡しない

▲河内川(道の駅山北前にて、9月20日、松下正和氏撮影)。

ままの巡検となりました。神奈川県立公文書館HPに掲載の資料目録等と被害状況に出てくる地名を重ねて車で回ったところ、河内川流域の山北町湯触などは濁流や倒木等もありましたし、道の駅山北の方にお話を伺うと三保ダム方向に上がると更に被害は大きいとのことでしたが幸いなことに、古文書被害は直接見つかりませんでした。



▲山北町谷ヶにて被害状況を把握。

その後、更に資料の所在を『山北町史』等で確認しつつ、町史編さん室の業務を引き継がれて



▲河内川ふれあいキャンプ場は被害にて営業中止中。

おり、山北町地方史研究会の事務局が置かれている、山北町教育委員会生涯学習課に電話にて照会させていただきました。とても丁寧に対応してくださり、町保管の史料は、被害がないことを確認済みであること。また、その他の史料については所蔵目録をお持ちで、史資料に何かあった際は連絡が入ることになっていることをお教えいただきましたが、被災史料の調査時に考慮すべき「三つの『大丈夫』論」の一つにもなっているように「被災の連絡がないので調査しなくても大丈夫」(松下正和「水損史料保全活動をめぐる現状と

課題』『水損史料を救う—風水害からの歴史資料保全—』岩田書院、2009年)とは限らないというお話をさせていただきました。教育委員会は歴史資料取扱指導員をなさっている、駒澤大学の久保田昌希先生に連絡を取ってくださり、久保田先生とも電話にてお話しさせていただいた結果、11月16日に再度山北町へ伺うことになりました。当日は、松下副代表・史料ネット運営委員の河野未央氏、宇野の三人で山北町教育委員会生涯学習課に赴きました。文化財担当の加藤拓也氏にはお会いできませんでしたが史料保存ならびに利活用についての詳しい資料をわざわざ作ってくださっていました。また、生涯学習課長の三尋木重夫氏にお話を伺えました。史料被害こそなかったものの世附地区で半壊家屋もあったとのことでしたが、この地区は9月の巡検等では意識していなかった地区であり、地域の方が確認されることの意義を再認識しました。また、公民館等の公的施設に被害はないこと、町史



▲ 酒匂川。看板より奥は静岡県。



▲濁流が流れる静岡県小山町。

編さん時に個人のお宅で所蔵していることが確認されている地域と被害があった地域は重ならず、町内では史料被害はないこともお話ししましたし、町史編さんの延長線上で行われている古文書を読む会についてもお教えくださいました。お忙しい中ご対応いただいた教育委員会の方々・歴史資料取扱指導員の久保田先生・山北町の皆様に感謝しつつ今後のあり方を考えてまいりたいと思いますが、あくまでも災害ボランティアの一環としての資料保存というスタンスを変えずにゆきたいと思っております。

本活動については小川千代子氏が二誌にてご紹介くださいました(小川千代子「神奈川ネット(仮称)立ち上げへ」記録管理学会『RMSJ ニュース』第52号および国際資料研究所『DJレポート』No.82+83、2010年)中にありますように、組織ではなく大学院生個人の呼びかけで始まったということが特徴なのかもしれません。個人による呼びかけで組織がどう立ち上がるかという課題は今もありますが、個人の意思が契機でも自治体に対応していただけたことは、今回の活動で得られた成果といえるかと思います。今回は幸いにして被害がありませんでしたが、そのことに安堵するのではなく、9月の打ち合わせでも議論されたように、被災の有無に拘わらず、資史料の保全が必要な際にすぐにレスキューができる、また必要な時は自治体から呼んでもらえる体制を整えていくことが必要だと思っております。神奈川県で、ひいては関東で史料ネット的な活動をしていくにはまだまだ微力ですが、まずは間尺にあった範囲で、たとえばメーリングリストによる県内における史料保全に関する情報交換を通じて個人のつながり(ネットワーク)を広げてゆくことから始めてまいりたいと思っております。ゆくゆくは、地域の歩みを示す史料とそれを守ってきた方々の思いを保全し、地域の皆様に史料をご活用いただける一助となる、広域を対象とした地域の資料情報ネットワークの拠点となるような史料保全ボランティアをめざしたい…と思っております。

皆様から更なるご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

(2010年11月16日記)

(うの・じゅんこ／学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士後期課程)

台風 9 号と宍粟市一宮町閨賀地区区有文書

板垣 貴志



▲2010 年 9 月 5 日、現地説明会のようす。満員御礼。

方々によって展示された。地域に伝来する古文書にはじめて触れる人も多かったようである。

史料ネットと閨賀地区との関係は、史料ネットの活動を報道する新聞記事（神戸新聞、2009 年 9 月 2 日）をご覧になった平田修一区長から送られた1枚の FAX から始まった。これは史料ネットとしても、史料所蔵者から直接レスキュー要請のあった水害では初めての事例で、画期的なことであった（『史料ネットニュースレター』第 60 号参照）。

2010 年 9 月 5 日、宍粟市一宮町閨賀地区にて閨賀地区区有文書の現地説明会が開催された。2009 年 9 月の台風 9 号水害被害からちょうど 1 年になる。閨賀地区で定期的に催されているふれあい喫茶の一環としておこなったこともあり、復興を祝う雰囲気の中、地元の方々の関心も高く、会場となった公民館には老若男女あふれんばかりの人が集まり盛会となった。会場には、水損した書類筆筭や絵図をはじめ、区有文書の一部、

水害の様子を写した写真が地域の



▲古文書展示のようす（2010 年 9 月 5 日）。



▲水損した絵図。



▲絵図の解体作業。



▲絵図の洗浄作業。

水損した史料の他にも公民館の倉庫には大量の古文書が残されており、平田区長からの要請もあって、これらの史料もあわせて調査することとなった。現地説明会に先立って私と吉原大志氏が事前概要調査をおこない（2010 年 7 月 31 日）、その結果、閨賀地区区有文書は、冊・袋単位で約 160 点にもものぼる膨大な資料群であり、近世中期から現代に至るまでの地域の歴史の変遷をたどる貴重なものであることが分かった。

またこれらの資料群は、歴代区長が持ち回りで伝えてきたもので、区長交代の際には、「引継目録」を調製して大切に保管されていたことも判明した。まず私たちは、この「引継目録」に着目

した。そこには、現用文書が徐々に歴史資料へと位置付けが変化していく様子が如実に表れていて、大変興味深かったからである。いままで一括されていた資料群は、平成3(1991)年より「古文書の部」と「引継文書の部」という2項目に分けられていき、時代の移り変わりのなかで、関賀地区にとって必要な文書が変化していた。

現地説明会では、吉原大志氏が「関賀地区区有文書について」と題して、史料ネットが関賀地区でおこなった取り組みと資料群の概要を説明し、「引継目録」の分析を通して文書の位置づけの変化を報告した。それを受け、私が具体的な山林利用の変化と文書の利用のされ方を報告した(「古文書の語る高尾山の利用変化—関賀地区区有文書より—」)。周囲を山に囲まれている関賀地区は、近世より隣村との山争いが絶えず、その度に区有文書がかえりみられ活用されていたことを説明した。

水損した書類筆筍に収納されていた古文書の応急処置から修復、史料返却、概要調査、現地説明会開催へと、理想的な活動サイクルが完遂できたことを大変嬉しく思っている。なかでも私が印象に残っているのは、2009年9月18日におこなった応急処置の際に、地域の方から吸水作業に必要な大量の新聞を差し入れていただいたこと、平田区長自らも作業を手伝っていただいたことである。専門家に任せてしまうのではなく、地域の歴史資料を地域の方自らが守り伝えていく。「どこでも・だれでも・簡単」にできる史料保全方法が伝わる手応えがあった。関賀地区での活動は、史料ネット活動の理想型であったと思う。地域の歩みを刻む区有文書が、これからも大切に保存されていくことを願っている。

(いたがき・たかし／歴史資料ネットワーク運営委員)



▲『引継書綴』(関賀地区区有文書より)。

「水濡れ史料の吸水乾燥ワークショップ」 ——5年の歩みを通して感じたこと——

河野 未央



▲吹田市立博物館でのワークショップ風景(2010年11月12日)。

本来ならば「水濡れ史料の吸水乾燥ワークショップ」について概要を述べ、その成果と課題をまとめなければならぬのだが、ここでは史料ネット事務局員、あるいは個人運営委員としてこれまでワークショップで講師を務めさせていただくなかで抱いた、個人的な思いを述べることをお許しいただければと思う。

史料ネットが「水濡れ史料の吸水乾燥ワークショップ」(以下、WS)の開催を開始してから、はや5年が過ぎようとしている。風水害対応の経験を伝えるとともに、きたるべき災害への備えとして、万一被害に遭っ

たときに「誰でも」廃棄からギリギリのラインで史料を救える「史料の救急救命士」としての活動が展開できるように、あるいはそうした活動の理解者を増やすことができればという思いから、今日まで続けてきた。それが「地道だが近道」である、という思いは、開始当初とさほどかわらない。

一方で状況は大きく変化した。ひとつは、2004 年以降風水害被害が全国各地から報告されるようになったことがあげられる。2009 年は兵庫県西部及び岡山県などで豪雨被害があり、史料ネットも佐用町・宍粟市等で活動を展開した。本年も静岡県、神奈川県等のほか、直近では台風 13 号によって奄美大島が大きな被害を受け、連日復旧・復興作業が続けられている。史料ネットも若手運営委員メンバーを中心に情報収集に努めているところである。

また、いまひとつに、各地の史資料ネット・予防ネットが精力的に活動を継続されていることがあげられる。史料ネットに対する社会的認識はまだまだ低いものの、少なくとも日本史学を学ぶ者、アーキビスト、博物館等文化財関係者などはどこかで一度はこうした「史料ネット」活動を耳にし、そうした活動を「知っている」という状況は生まれてきているように思う。



▲三田祥雲館高校でのワークショップ風景(2009 年 7 月 16 日)。

他にも様々な要因はあるが、第一には災害への危機感の共有、第二にはネット活動の広がりが素地となり、WS 開催状況も大きく変化してきた。当初は関西圏の大学、史学科のゼミへ依頼し、史料ネット「持ち出し」の企画として WS を開催させてもらっていたのが、全国規模で WS 開催の依頼が入るようになってきた。「古文書を読む会」など、市民団体などからお声がけいただけるようになったのも、近年に入ってからのことだ。また、2009 年に佐用町・宍粟市等での活動を経験した史料ネットメンバーが、新たに WS 講師を務めるようになった。WS 開催数が飛躍的に増えたのは、こうした史料ネット側の変化もあった。

もっともどこで開催しても、WS にご参加いただいた方はいずれも熱心に作業に取り組まれ、技術的な点から災害の被害状況まで様々な質問が寄せられる。二度と災害は起こってほしくないと思いながらも、万一の時を考えると、講師をしている私が逆に励まされ、非常に心強く感じることもしばしばだ。その後 WS 参加者の中から、現実の災害対応へ自ら取り組まれる方々が出てきた。講師を務めさせていたっている私などよりもずっと高い意識をもって WS に取り組まれていたのだということがわかり、頭が下がる思いがする。

今日まで活動を継続することができたのは、こうした状況の変化、もっと言えば周囲の支えによるところが大きい。大規模自然災害の多発という、もっとも忌避すべき事態がその根底にあるという点では大きなジレンマや複雑な思いがあるが、冒頭で述べたような小さな願いにも似た思いを受け入れていただき、様々な場や機会を提供して下さった点は感謝にたえない。

こうした私自身の思いはおそらく今後も変わらないと思う。持ち込み企画であっても、もっとも多くの場で WS を開催できればと考えている。なぜなら「地道な近道」の到達点はまだまだ遠い高みにあるからだ。仕事柄、アーカイブズの論考に触れることが多くなったが、ふとしたことから坂本勇氏の文章に触れ、ますますその思いを強くしている(「資料の保存と修復—最後の力を資



▲兵庫県立歴史博物館でのワークショップ風景(2010 年 4 月 29 日)。

料保存に―』『千葉県の文書館』第 14 号、2009)。坂本氏は、修復家の立場から、今後地球温暖化による巨大自然災害の多発、都市災害(東京直下型大地震)などが予想されるにもかかわらず、全世界的にマス・コンサベーション(大量修復)及びアクティブ・コンサベーションの経験・設備が失われている現状を指摘する。そのうえで「災害時には、多くの場面での「判断ミスと遅れ」は人とモノの死か破滅を意味する」と改めて警告を発しているのだ。多くの災害現場で活動された経験を持つ坂本氏の目を通してみれば、人命救助の面も含めて、災害時限りなく多くの「できること(できるはずのこと)」が残されているのだろう。

災害時にいかに活発に動けるかは、日常時のアーカイブズの普及活動いかに関わっている。史料ネットも「災害時(非常時)」と「日常時」の相関関係については繰り返し唱えてきており、その点は坂本氏と認識を同じくしている。しかし、後者の点で、坂本氏が唱える「楽しいアーカイブズ」は、アーカイブズの社会への浸透度という点では、少なくとも私などが考えているよりもずっと深いものである。いずれにせよ、「そこまで徹底しないと、資料保存などできない」という坂本氏の痛烈なメッセージを受け取ったあとでは、現状で満足することは、とても許されるものではなかった。

もっとも、坂本氏の示す到達点を本気で目指そうとするならば、別の手法をとり、問題にアプローチしていくことが必要だが、残念ながらそれは今の私などの手にはおえない。ただ、私としては、WSを通して生まれた様々な人・地域とのつながり、認識の共有を今後も大事にできればと思うし、少しでもその輪を広げられればと思っている。なので、もし拙文を読んで、「WSをやってみたい・知りたい」と思われた方は、ぜひとも史料ネットにご連絡いただき、ご相談いただければと思う。その「思い」が、新たな史料保存につながっていくのであり、小さな一歩をふみだすためにも、会員諸賢には「声をあげる」というかたちでのご協力を願う次第である。

(この・みお／歴史資料ネットワーク運営委員)

「第 12 回火垂るの墓を歩く会」参加記

澤井 廣次

2010 年 8 月 3 日(火) 毎年歴史資料ネットワークが例年協力し、今年で 12 回目を数える「火垂るの墓を歩く会」(二テコ池～香栢園浜コース)が開催された。今回、私は初めてこの「歩く会」に同行させていただくこととなった。

当日は午前 9 時半に阪急苦楽園口近くの公園に集合した。まず驚かされたのはその参加層である。失礼ながら年配の方々がほとんどであろうと思っていたが、そうではなかった。もちろん年配の方も多かったが、30～40 代と見受けられる人や私と同じ世代であろうと思う人もいた。中でも親子連れが目立った。主催者の方が言うには、「夏休みの自由研究のために来る親子が多いのだ」と。参加者は 40～50 名ほどであったが、子どもから年配の方までが一緒に歩く不思議な集団であった。



▲集合場所で当日の見学ルートについて説明を受ける参加者。

私の中でクライマックスは最初に訪れたニテコ池であった。清太と節子が一時期を過ごしたほら穴こそ存在しなかったが(ほら穴の存在は原作者野坂昭如氏の創作であろう、と解説していただいた)、そこはまさに清太と節子が過ごした池の畔であった。



▲ニテコ池の前で、解説員がパネルを手に説明を行った。

また、解説員によるパネルを使用した説明も大変分かりやすかった。そのおかげで、「アニメのこの場面のモデルが、いま目の前にあるこの風景かぁ」とすぐに感じる事ができた。

「歩く会」の一行は、ニテコ池のあと夙川沿いに南下→西宮回生病院→香栢園浜へと向かった。私は、戦時下に生きた清太や節子がどのような思いで夙川沿いや香栢園浜を歩き、また空襲をどのように感じていたのだろうか、という思いを巡らせながら歩いていた。

当日は相当暑かった。集合場所で購入したミネラルウォーターは夙川沿いで飲み干したし、シャツは水浸しになっていた。「暑い…」とふと口にしてしまう。清太も同じように「暑い…」とつぶやいていたのだろうか。きっと爆撃による爆風で相当暑かったに違いない。解説員は、「もし戦時下に池の畔で生活しようものなら爆撃による熱風で生活どころではない」とも解説していた。

参加するまでは、アニメを見ても温度を感じることはなかった。しかし今、アニメさらに敗戦直前の映像などを見たとき、シャツが水浸しになるほどの暑さを感じるようになるだろう。

私はこれこそが「歩く会」の魅力の一つなのだろうと感じた。「火垂るの墓」という作品を媒介として現代を生きる人間に戦争について考える時間と機会を与えてくれる、そのような大きな力があるのだと思った。そのような魅力、また分かりやすい解説などによる戦争や戦時下の日本についてのイメージのしやすさが、世代を越えて「歩く会」に人々を集め続ける原動力となっているのだろう。

何かを理解しようとするときに追体験は非常にその理解を助ける。「歩く会」への参加は、あなたの戦争への理解や思いを助けてくれるのではないのでしょうか。私が、シャツが水浸しになるほどの暑さを感じたように。



▲西宮回生病院の前で解説員の説明を受ける。暑さのため日傘・帽子が目立つ。

(さわい・ひろつぐ／神戸大学大学院人文学研究科後期博士課程)

史料ネット NEWS LETTER No.64 2010年12月3日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部内 史料ネット

TEL&FAX:078-803-5565 (開室時間 平日の午後1時～5時)

e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp

被災史料救出活動のようす・詳細は日々ブログに更新しています。

http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net